

New Zealand に支えられて

千葉すずな（東北公益文科大学公益学部 2年）

私は、最後までこのニュージーランド短期留学に行くことに実感がわかなかった。なぜなら英語が大の苦手で、しかも嫌いだったからだ。それなのになぜこの短期留学に参加したのかというと、学生のうちに海外の文化を知ってカルチャーショックを受けてみたかったからである。そこに、友達がちょうど留学に行くというので半ば無理やり自分に行くという状況に追い込んで、この留学に参加した。そのため英語力にはかなりのコンプレックスをもったまま、私は日本を発った。

韓国で予定外に1泊することになったので、ニュージーランドに着いたらホストファミリーに会わず、まずクラス分けのテストを受けた。当たり前だが問題文からすべて英語で、やっと英語圏に来たのだと実感した。

その後、ホストファミリーと対面した。私の迎えには、ホストマザーの Rhonda と娘の Olivia とその友達2人が来てくれた。私は娘が一人と聞いていたので、大勢の迎えに少し戸惑った。みんなでいる教室から一人出て、そこから英語しか話せない場所で生活する。その状況になると、教室から出るのは想像していたよりもかなりの勇気のいることだった。それでもファミリーたちについて行き教室を出ると、途端に質問攻めにあった。私はさっそく英語力の無さを実感した。出身地や大学のことを聞かれて、言いたい単語は出てくるが、それを思うように文章にできないのだ。しかしホストファミリーたちは、拙い英文や単語から精一杯読み取ってくれ、私の理解できない単語があったら別の言葉に置き換えて話してくれた。

家では息子の Sam が迎えてくれた。ホストファザーの Wayne は大工

なので、何日か家を空けることがあり数日後に会った。みんな本当によくしてくれたので全くホームシックにならなかった。だからこそ、私はずっともどかしさを感じていた。自分の感情をうまく表現できないのだ。

留学して初めての休日で、ホストファミリーは私を観光地に連れて行ってくれ、しかも2泊した。Rhondaの実家でおばあちゃんのバースデー・パーティに参加させてもらい、Oliviaが海で4.5km泳ぐ大会の応援にも行った。観光では滝や温泉や間欠泉を見て、ほんとうに充実していた。でも、とても感動して感謝していても、私はそれを伝えられなかった。日本語なら「よかったね」「すごく綺麗」「頑張ったね」「こんなことまでわざわざありがとう」など伝えたいことはたくさんあった。しかし、英語の感嘆詞が自然に出るわけがない。よく考えたら、今までの授業で感情を表す言葉はしっかりと習ってきていないと気づいた。授業で習う英語と話すときの英語は違ふとよく聞くけれど、このことかと思った。うまく英語が話せないから、せめて毎回感謝していることとても嬉しいということを伝えたくて、ニュージーランドでは感情を表す日常会話ばかりを勉強していた。

毎日の授業は英語なのに全然苦痛ではなく、むしろ楽しかった。クラスの人ほとんど日本人なのだが、たまに中国人や韓国人、アラビア圏の人もある。英語の実力もまちまちだ。中国人は発音がしやすいのか、かなり英語の発音がうまい。しかしよく聞いてみると、話している内容は私たちとあまり変わりがなく、発音が違うだけでこんなにもうまい印象になるのかと感心した。今まで私は重要視していなかったが、発音は大事だと学んだ。

また、留学生だからかもしれないが、みんなが「自分から声をかける」「声をかけられたら受け入れる」という姿勢で人と関わっているから、初対面でも話しやすく声をかけるのが億劫ではなかった。正直に言って、

日本でならわざわざ知らない人と話さない。ましてやいつも一緒にいる仲のよい人がいるのなら、そんなことをしようとも思わない。日本には、私と同じような考えの人は多くいるように思える。仲間意識というのは素敵な感情だ。しかし、まわりに違う考え方や生き方の人がいるのに何も知らずとしないのは、せっかく新しいことを知るチャンスなのにもったいないと思う。ニュージーランドでは、今日はどんな人と話せるのだろうとわくわくしながら学校に行っていた。私は大学までバスで行くのだが、そのバスにはほかの留学生もたくさん乗っている。そこでも誰かと交流できるし、その状況がとても心地よかった。ここに来て誰かと関わるのが怖いと言っているのはもったいない。日本にいるよりも、日本人もフレンドリーで知り合いもたくさんできた。仲間意識を「留学生」や「同じ大学」で広げていったから、気軽に話すことができたのではないだろうか。

毎日6時頃に起きてサンドイッチを作り、大学で授業を受け、帰りは街の中を探検して帰る。そして、家では夕飯を食べてファミリーと休んで10時には寝る、というような生活をしてきた。すると、ケータイなどいらないということに気づかされる。日本ではほとんどケータイを手放せない生活をしているが、明日になれば会えるからいいと思うようになった。SNSをチェックするばかりの生活がおかしく感じる。なぜなら目の前に楽しいことがいっぱい、目をはなしていられなかったからだ。画面など見ているひまがない。私はファミリーと「会話」がしたかった。

英語で会話など、この実力では難しい話だった。しかし早貴さんが持って来て余っていたお土産のだるまおとしを、もったいないので私のファミリーにあげたことで私は急速に仲良くなれた。Oliviaは13歳でSamは16歳だったから子供と遊ぶということはなく、なかなか仲良くなるきっかけがなかった。しかし、だるまおとしを持っていったら興味

をもってくれ、しかも家族みんなが遊んでくれたのだ。Olivia とは、一緒にムービーを撮るまで仲良くなれた。ほかの公益大生 3 人にだるまおとしを成功させるところを見せたいと言うので、私が終始撮っていた。何度も失敗するし、はじめのコメントもどちらかが笑ってしまうから何度も撮り直した。最後の一つになるころにはもう寝る時間を過ぎていた。もちろん私はろくな英語は話せていないのだが、Olivia が最後のだるまを倒してしまったときに「Secret! Secret!」と言ってだるまを元に戻したり、最初から倒してしまったときは「Practice」と言ったりしていた。日本でも同じようなことを言うだろうと思いながら、私も一緒になってその言葉を続けていた。ただ同じ言葉を言っているだけなのに、そのときだけはとても英語が身近に感じられたのだ。おそらく会話ができればこんな感じなのだと思う。もちろんその日はとても楽しかった。

そして私は、ニュージーランドの人の優しさ、あるいは寛大さに、カルチャーショックを受ける。2 週目の金曜日、公益大生 4 人でバスを使ってセンター街に行き一緒に夕飯を食べた。しかし予想外に時間がかかってしまい、帰る予定の時間が過ぎてしまった。バスで帰ると伝えていたが、外に出ると暗くて雨が降っていて、街もネオンで外国の夜の街らしくなっている。私たちは簡単に道に迷ってしまった。怖かったし、申し訳なかった。しかし、その時 Rhonda からメールがきて「今どこ？よかったら車で送るよ」と言われた。今いる場所がわからなかったので、ようやく見つけたガソリンスタンドでわかるまでの道のりを聞いた。すると、道を教えてくれた女の人が「私がそこまで送ってあげるよ」と車を出してくれたのだ。お互いにとって危険だという考えもあるし、日本ならそこまでしないだろう。突然訪ねてきた外国人の学生を、わざわざ車で送ってくれるその優しさに私は感動した。しかし Wayne はまったく気にしないで、写真を見て「こんなものも食べるなんてなかなかやる

ね」と冗談を言ってくれるし、本当に心が救われた。ここの人たちの優しさを身をもって体験した日だった。自分の損得を考えずに行動することが、自分にとってはかなり新鮮だった。

こうしていくうちに、私は3週間の短期留学を終えた。まだ学んだことはたくさんあるが、書ききれそうにない。積極性がないと損なだけだと思い知らされたし、英語への苦手意識は知らないうちに好意へと変わっていった。この3週間は、普段の3週間より多くのことを学べたと思う。忙しいが楽しくてキラキラした毎日だった。語学力が心配だなんて言ってられない。どうせ何かが足りないと感じかされるのだから、少しでも興味があったら留学を考えてみてほしい。胸を張って行ってよかったと言えるし、きっと3週間では物足りないと感じるだろう。私はまた **Warlow Family** に会いに行きたいと思っている。今度はきちんと感謝の言葉を言いこ。

最後に、この短期留学に携わったすべての人に感謝したいと思う。帰りの空港までのバスの運転手が寝坊したり、その後韓国でキャリーケースがすぐに秋田に送られて荷物なしで1泊したのも、今ではいい思い出である。ほんとうに、貴重な体験をありがとう。